

## 第9章 京大病院遺跡出土の土器

—古代末から中世—

宇野隆夫

京大病院構内では昭和51・52年度に、京都大学医療技術短期大学部校舎予定地および同医学部附属病院 RI 診療棟予定地の発掘調査が実施された(図版1-19・34・39)。その結果、京大病院遺跡 AE15・AH17・AF14区で弥生時代から近・現代に至る大量の遺物が出土し、その概要は京大埋文年報77と本年報で報告した。また詳細は本報告書でまとめる予定である。本章では、これらの遺物の中で古代末から中世に至る土器を中心にして、調査によって得た知見をまとめ、今後の調査と研究の方向を探ることとする。

### 1 京大病院遺跡出土の皿と鉢と羽釜

京大病院遺跡では多くの器種の土器が出土したが、ここでは出土例が多い土師器皿と須恵質大平鉢と瓦器羽釜(以下皿と鉢と羽釜と略す)をとりあげることにする。

**皿** 皿は胎土に少量の砂粒を含み、色調は明褐色または淡褐色のもの(第40図1~18)と灰白色のもの(第41図1・2)がある。調整は底部内面に撫で、体部内面と口縁部内外面に横撫で、底部と体部の外面に指押えまたは撫でを施すものが大部分を占める。口径は15cm, 12cm, 9cm, 7.5cmに中心がある。<sup>(1)</sup>これらは次のように分類できた。なお口径が10cm以上のものをA類、10cm未満のものをB類とする。

A<sub>1</sub>類 口縁部を外反させ端部を内側に肥厚させる。器壁が薄く作りが良い(第40図1)。

A<sub>2</sub>類 口縁部に2段の横撫でを施し外反させ、口縁端部を丸くおさめる(第40図2)。

A<sub>3</sub>類 口縁部に2段の横撫でを施し、口縁端部に面取りを施す(第40図3)。

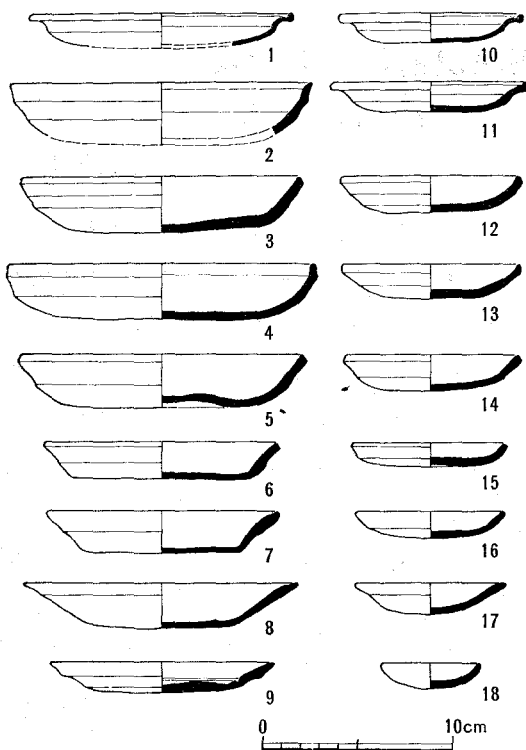
A<sub>4</sub>類 口縁部に2段の横撫でを施すが、上段の横撫でが強く、つまみ上げたようになる(第40図4)。

A<sub>5</sub>類 口縁部に1段の横撫でを施し、口縁端部に面取りを行なう(第40図5)。

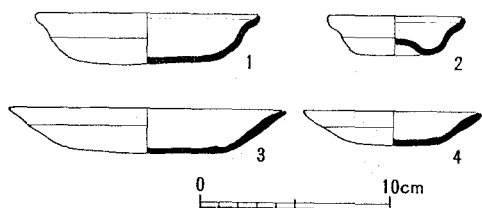
A<sub>6</sub>類 口縁部に1段の横撫でを施し、口縁端部に面取りを行なう。体部が直線的で、体部と底部の境で屈曲する(第40図6)。

A<sub>7</sub>類 口縁部に1段の横撫でを施し、口縁端部が丸味をもつ。口縁端部を内側に巻くものもある。体部の指押えが強く、やや外反し、体部と底部の境が屈曲する(第40図7)。

A<sub>8</sub>類 口縁部に1段の横撫でを施す。体部は直線的に低く立ち上がる。体部内面に時計廻りの丁寧な撫でを施し、底部内面の周縁に圏線を生じる(第40図8)。



第40図 土師器の皿



第41図 土師器の皿

A<sub>9</sub>類 口縁部に1段の横撫でを施す。体部は低く立ち上がり、底部内面の周縁に沈線を施す(第40図9)。

A<sub>10</sub>類 口縁部に1段の横撫でを施し、口縁端部をやや内側に巻く。口径に比して器高がやや高く、器形は丸味をもつ(第41図1)。

B<sub>1</sub>類 口縁部にA<sub>1</sub>類と同じ特徴をもち、作りが良い(第40図10)。

B<sub>2</sub>類 口縁部を外反させ、口縁端部を内側に肥厚させる。器壁が厚く、作りが悪い(第40図11)。皿B<sub>1</sub>類の系統をひくが、大型のものにはこのタイプの皿がみられない。

B<sub>3</sub>類 口縁部にA<sub>3</sub>類と同じ特徴をもつ(第40図12)。横撫でを施すには口縁部の幅が狭いためか出土例は少ない。

B<sub>4</sub>類 口縁部にA<sub>4</sub>類と同じ特徴をもち、口縁端部をつまみ上げる(第40図13)。

B<sub>5</sub>類 A<sub>5</sub>類と同じ特徴をもち、体部は次のB<sub>6</sub>類より丸味をもつ(第40図14)。

B<sub>6</sub>類 口縁部にA<sub>6</sub>類と同じ特徴をもち、扁平である(第40図15)。

B<sub>7</sub>類 口縁部にA<sub>7</sub>類と同じ特徴をもち、底部がやや丸味をもつ(第40図16)。

B<sub>8</sub>類 口縁部にA<sub>8</sub>類と同じ特徴をもつが、底部と体部の境は丸味をもち、圏線を生じない(第40図17)。

B<sub>9</sub>類 小型の手捏ねの皿である(第40図18)。

B<sub>10</sub>類 口縁部にA<sub>10</sub>類と同じ特徴をもち、底部が上方に突出する(第41図2)。

鉢 鉢は高台をもつものも数例あるが、平底のものも多く、重ね焼きの結果か意図的なものか口縁端面のみに、黒っぽい光沢をもつものがある。梶崎彰一のいう須恵器系第2

類陶器に相当するものである〔榑崎74〕。

1類 口縁端面が外面と直角をなし、外側へ張り出す(第42図1)。

2類 口縁端面が外面と直角をなす(第42図2)。

3類 口縁端面が外面と鈍角をなす(第42図3)。

4類 口縁部の横撫でが強く、口縁端面がやや拡張する(第42図4)。口縁端面はやや丸味をもつものと、横撫でによって外反するものがある。

5類 口縁端面が拡張し、口縁下端の拡張も顕著である(第42図5)。

6類 口縁部が上下に拡張し、器壁が厚い(第42図6)。

以上は京大埋文年報77で須恵質土器として藤原喜信が分類したものに当たる。2類が同年報77のⅠ類、3類がⅡ類、4類がⅢ類、5類がⅣ・Ⅴ類、6類がⅥ類にはほぼ相当する。

**羽釜** 羽釜は鋳部の径が10cm以下のものから30cm以上のものまであり、三脚をもつものもたないものがある。

1類 口縁部が内傾する(第43図1)。

2類 口縁部が短く直立する(第43図2)。

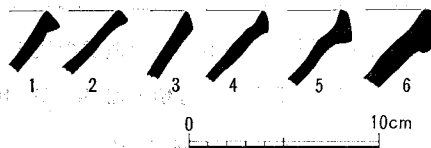
3類 口縁部がやや発達し、口縁上端の撫でが強い(第43図3)。

4類 口縁部が発達し、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる(第43図4)。

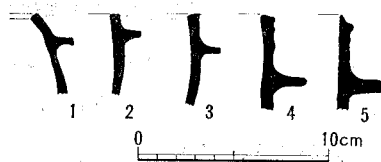
5類 4類と同じ特徴をもち、口縁端面に凹線を施す(第43図5)。

## 2 京大病院遺跡における知見と考察

次に、調査で得た知見を基礎にして以上の土器の変化と組み合わせについてまとめることにする。まず皿からみることとする。皿A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>類はAF14-川SX02<sup>(9)</sup>から出土した。SX02は護岸を施した川で、護岸のため貼り付けた粘土内から皿B<sub>1</sub>類が出土している。SX02が埋没した後の堆積層や遺構では皿A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>類は細片が少量出土しただけである。皿A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>類はAF14-井戸SE20で共伴した(第11図)。AF14-暗灰色シルト(第10層)では皿A<sub>3</sub>・B<sub>3</sub>類が共伴した(第12図)。AF14区の井戸群ではSE07・10のように皿A<sub>3</sub>・B<sub>3</sub>類と皿A<sub>4</sub>・B<sub>4</sub>類が共伴することが多く、これに皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類が加わることがある(第13図)。また皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類がまとまって出土した例としてAF14-SE09がある。皿A<sub>6</sub>・B<sub>6</sub>類はAE15-溝SD102で共伴した。皿A<sub>7</sub>・B<sub>7</sub>類はAE15-土坑SK24から出土し、皿A<sub>10</sub>・B<sub>10</sub>類と共伴してい



第42図 須恵質大平鉢



第43図 瓦器の羽釜

る〔京大埋文年報77〕。また皿A<sub>9</sub>・B<sub>9</sub>類はAH17-SD1で共伴した(第5図)。

以上が各類の皿が出土した遺構の代表的なものであるが、これらの共伴関係と土器の特徴からみて、皿A<sub>1</sub>~A<sub>10</sub>類と皿B<sub>1</sub>~B<sub>10</sub>類はそれぞれ大小のセットをなすと考える。

鉢についてみると、鉢2類はAF14-SE20で皿A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>・A<sub>5</sub>・B<sub>4</sub>・B<sub>5</sub>類と共伴した(第11図)。鉢3類はAF14-SE14で皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類と共伴している。鉢4類はAE15-SD102で皿A<sub>6</sub>・B<sub>6</sub>類を伴出した。鉢5類はAE15-SK23で皿B<sub>10</sub>類と共伴した。鉢1類はAF14-SE07で皿A<sub>3</sub>・B<sub>3</sub>類と共伴したが出土例は少ない。

羽釜では、羽釜1類がAF14-SE13で皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類と共伴した。羽釜2・3類は良好な共伴例がなく、羽釜4・5類はAF14-SD05とAF14-SE06で皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類を伴出した。

以上の京大病院遺跡から出土した土器の組み合わせについては、皿A<sub>3</sub>・B<sub>3</sub>類-皿A<sub>4</sub>・B<sub>4</sub>類-鉢2類、皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類-鉢3類-羽釜1類、皿A<sub>7</sub>・B<sub>7</sub>類-皿A<sub>10</sub>・B<sub>10</sub>類-鉢5類、皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類-羽釜4・5類のセットを想定している。そこで次にこれらを他遺跡の例と比較して、その妥当性とおおよその年代を考えることにする。

皿A<sub>1</sub>類の口縁部を外反させ端部を内側に肥厚させる手法は、平城京SD650B様式〔奈文研74〕の杯Aの口縁部にみられる。<sup>(3)</sup>これらと平城京SE311B様式〔奈文研62〕、SD650A様式の杯Aを比較すると、SD650B様式では口縁部の外反が強くなり篋調整の手法が衰退する傾向がある。皿A<sub>1</sub>類は口縁部の外反がSD650B様式の杯Aより強く、篋調整の手法がみられない点から、その次の段階に位置づけることができる。平安京における皿A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>類の類例は平安京左京四条一坊(以下四条一坊と略す)1号トレンチ第Ⅲ層出土品にある〔平安京調査会75図版55〕。京大北部構内でも皿A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>類は黒色土器、平安中期の瓦、延喜通宝などを伴出した例があり〔中村73〕、10世紀を中心とする年代をあてている。<sup>(4)</sup>

皿A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>類の類例は、四条一坊土壙SK-2と井戸SE-8出土品にある〔平安京調査会75図版57・58〕。また井戸SE-8淡緑灰色泥砂層から寛治5(1091)年5月13日の墨書がある鉢1類が出土している。井戸SE-8出土の皿B<sub>2</sub>類は口縁部の外反が特に弱く、作りが粗雑である末期的な特徴をもつ点からみて、皿A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>類の年代の中心は11世紀にあり、この種の皿は12世紀に入るとまもなく消滅すると考えている。<sup>(5)</sup>なお井戸SE-8出土品には皿A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>類のほか口縁部に1段の横撫でを施し、口縁端部を丸くおさめる皿がある。

皿A<sub>3</sub>・B<sub>3</sub>類と皿A<sub>4</sub>・B<sub>4</sub>類の類例は四条一坊土壙SK-10、井戸SE-2〔平安京調査会75図版59・60〕、烏丸楊梅下ル瓦包含層〔烏丸調査会77図15〕にある。これらは皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類を伴なう例が多い。皿B<sub>2</sub>類に共伴する大型の皿には2段または1段の横撫でを施し、口縁端

部を丸くおさめる特徴がある。このことから考えて、皿A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>・A<sub>5</sub>・B<sub>3</sub>・B<sub>4</sub>・B<sub>5</sub>類の出現はほぼ同時期で、口縁端部に面取りを施すようになる時期として把握できそうである。他方、皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類がまとまって出土する例も四条一坊井戸SE-3〔平安京調査会75図版60〕をはじめとしていくつかあり、これらは皿A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>・B<sub>3</sub>・B<sub>4</sub>類と共伴するものより、作りがやや粗雑になる傾向がみられる。AF14-SE11では皿A<sub>4</sub>類が12世紀前～中葉の瓦(図版9-II 44～47)を伴出したが、皿A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>・B<sub>3</sub>・B<sub>4</sub>類の年代の中心もこの時期にあり、12世紀後葉から13世紀にかけて皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類に統一されていくと考えている。

鉢との関係をみると四条一坊土壙SK-10や井戸SE-2では、鉢3類が皿A<sub>3</sub>・A<sub>4</sub>・B<sub>3</sub>・B<sub>4</sub>類を伴出し、京大病院遺跡での知見とは若干の差異がある〔平安京調査会75図版59・60〕。また四条一坊溝SD-3黄褐色砂層では羽釜1類と皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類が共伴している〔平安京調査会75図版61〕。

皿A<sub>6</sub>・B<sub>6</sub>類は、皿A<sub>5</sub>・B<sub>5</sub>類の口縁部の特徴をひき、体部と底部の境が屈曲するようになったものである。類例は四条一坊井戸SE-6〔平安京調査会75図版63〕、烏丸夷川下ル土坑37〔烏丸調査会77図13〕の出土品にある。井戸SE-6黄褐色泥土層では皿A<sub>6</sub>・B<sub>6</sub>類は鉢4類を、土坑37では鉢3類と羽釜1類を共伴している。

皿A<sub>7</sub>・B<sub>7</sub>類に関しては良好な一括資料を得ていないが、土器の特徴から、皿A<sub>6</sub>・B<sub>6</sub>類と皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類の間に位置し、皿A<sub>10</sub>・B<sub>10</sub>類、鉢5類、羽釜2・3類などを伴うと考えている。

皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類の類例は山科寺内町遺跡第2号石室出土品にある(第41図3・4)<sup>(6)</sup>。同石室には焼土が厚く堆積し、山科寺内町が天文元(1532)年に焼き打ちされた時のものと推定され、16世紀前半を中心とする年代をあてることができる。また烏丸夷川上ル溝では皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類が羽釜5類と共伴している〔烏丸調査会77図14〕。

皿B<sub>10</sub>類はヘソ皿とも呼ばれ、室町時代の標識的な遺物とされているが京大病院遺跡の知見では皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類はヘソ皿を伴わない。それに対して烏丸夷川下ル土坑11〔烏丸調査会77図14〕、東洞院大路・曇華院跡A-10土器溜2〔平安博物館77第36・37図〕同志社女子大学図書館建設予定地SE301〔同志社調査会76第12図〕では皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類がヘソ皿を共伴している。これらの皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類が伴うヘソ皿は皿B<sub>10</sub>類より底部の突出が小さく作りが悪い傾向があり、ヘソ皿を分類できる可能性がある。また皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類としたものにも作りに相違のあるものがあり、より細かい分類が必要である。なおAF14-SD05では、皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類を出土した層の直上から、口縁下端が肥厚し体部の指押えが強く、見込み周縁に凹線状の圏線を生じる皿が出土している(第15図II 34)。類例は同志社大学図書館建設予定地SK

340 [同志社調査会76第12図], 京都府田辺町都谷中世館跡 SK08 [同志社調査会77b 第20図]にあり, 皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類に続く時期のものかと考えている。

皿A<sub>9</sub>・B<sub>9</sub>類は江戸時代の遺構からよく出土するものである。くらわんか手の伊万里碗・皿を伴出する(第16図)ことから江戸後期のものとする[同志社調査会77a p.44]。京大病院遺跡では良好な資料が出土していないが, 皿A<sub>8</sub>・B<sub>8</sub>類と皿A<sub>9</sub>・B<sub>9</sub>類の間には数型式の土器があるようである。

### 3 小 結

以上のように簡単に京大病院遺跡と他遺跡の例を比較した結果, 平安京を中心とする地域で, 土師器皿は基本的にはA<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>類からA<sub>9</sub>・B<sub>9</sub>類へと変化し, これに応じて須恵質鉢や瓦器羽釜にも変化があることを推定した。これらは煮沸, 調理, 供膳の基本的な組み合わせとして理解できるものである。ただし京大病院遺跡の出土品は現在整理中であり, ここでは代表的なものに絞って考察した。これらはより細かく分類することができ, また他の器種や, 各種陶磁器をはじめとする他の種類の土器も含めて考察を加えていく必要がある。今後各器種別の編年や地域差に関する研究が進めば, 各時期・各地域ごとに, もっとも良好な一括資料をあげ, 土器様式を設定することが可能になると考えている。

なお, 同志社大学校地学術調査委員会の松藤和人氏, 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会の永田信一氏から現地説明会などの場で有益な御教示を頂いた。

#### [註]

- (1) 規格の考察は別の機会に行ないたい。
- (2) 遺構については, AE15-SE01(京大病院遺跡AE15区井戸1番)のように表示する。
- (3) 皿A<sub>1</sub>類は規格では皿か杯か決め難いが, 本来は杯の系統をひくものであろう。
- (4) 平安前～中期の遺物は長岡京出土品との比較が重要であるが, 別の機会に譲る。
- (5) 京大病院遺跡では皿A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>～A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>類の時期の資料が少ないが, 京大北部構内の遺跡では, より良好な資料があり, さらに細分できる。
- (6) 同遺跡を調査した岡田保良氏に教示を得, 六勝寺研究会に実測図の掲載を許可して頂いた。